

座談会

皮膚科診療所における爪白癬治療 ～過去、現在、未来～

2014年9月、日本初の外用爪白癬治療剤「クレナフィン®爪外用液10%」が発売されました。本剤承認前は、爪白癬治療は経口抗真菌薬が原則でしたが、現在は外用剤が主流となっています。本企画では、爪白癬治療の過去から現在までの変遷、そして今後の治療の展望について、皮膚科診療所の先生方にご討論いただきました。

楠原皮膚科医院院長
楠原 正洋 先生

のぐち皮ふ科院長
野口 博光 先生

爪白癬治療の変遷

過去

爪白癬治療の重要性～爪白癬を侮ることなかれ～

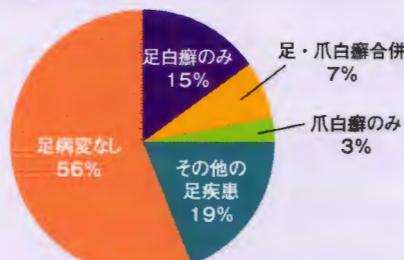
楠原 爪白癬は足白癬のようなかゆみの症状がないため、診察で初めて爪白癬に罹患していることを知る患者さんは少なくありません（図1）¹⁾。当院でも、足白癬治療や爪処置（高齢・要介護者）、家族の罹患を契機に受診したケースが目立ちます。ただ、最近では、爪白癬を疑って受診する人も増えました。とくに女性は足が気になるようですね。野口先生の診療所ではいかがでしょうか。

野口 確かに、“水虫は治療しなければ治らない”という啓発活動が浸透し、足や爪への関心が高まってきたと感じています。実際、爪白癬に関しては30～40代の若い人も美容的な観点から治療してほしいと、来院する方も少なくありません。

楠原 その通りだと思います。診察で爪白癬が見つかった患者さんには、爪白癬は足白癬の感染源でもあり、爪白癬を完全に治療しなければ、いくら足白癬を治療してもよくならないことを説明し、治療を受けていただいています。

野口 当院では、近隣施設から糖尿病や透析中の白癬患者も紹介されてきます。これらの患者では白癬が悪化することで、蜂窩織炎や壊死に至ることもあります。海外の報告²⁾でも蜂窩織炎のリスクとして白癬が挙げられており、慢性疾患有する患者や高齢者の爪白癬も軽視できません。

図1 足白癬・爪白癬の潜在罹患率



フットチェック調査参加者の疾患の内訳 (n=34,730)

日本人の4人に1人が足に何らかの白癬を有し、5人に1人（約2,500万人）が足白癬、10人に1人（約1,200万人）が爪白癬に罹患している。

目的 我が国における足白癬・爪白癬の真の潜在罹患率を把握する。
対象 全国の日本臨床皮膚科医会の会員全員（4,264名）
および フットチェック調査（2007年4月1日～5月31日に外来受診した患者の中から無作為に100名抽出し、水虫以外の目的で受診した患者で、調査に同意が得られた方の足病変について観察し、調査票に記載）の協力を依頼した。参加協力の許諾を得られた756施設で、56,047症例を回収した。そのうち、「足の水虫」で受診した12,075例を除く43,751例の中で本調査に同意の得られた34,730例について解析を行った。

結果 我が国の潜在罹患率は、足の白癬（足白癬と爪白癬の少なくともどちらかに罹患）が24.7%、足白癬が21.6%、爪白癬が10.0%であった。

仲 弥ほか：日臨皮会誌, 26 (1) : 27-36, 2009

クレナフィンの登場で変化した爪白癬治療

楠原 爪白癬の治療は、今まで経口抗真菌薬による内服療法が中心でした。しかし、薬物相互作用や肝機能障害により内服できない、あるいは望まない患者さんも多くいましたので、その場合は保険適応のない従来の外用抗真菌剤で対応するしかありませんでした。ところが、2014年に日本初の外用爪白癬治療剤「クレナフィン®爪外用液10%」が登場した